

「やりくり」授業の成果と今後の展開

岡真奈美

鳥取大学附属中学校 研究主任

E-mail:oka-m@tottori-u.ac.jp

OKA Manami(Tottori University Junior High School):Achievements and future challenges of the "YARIKURI" lessons

要旨—鳥取大学附属中学校で4年間行ってきた研究を総括する。「やりくり」という考え方をういて授業をつくることで従来の授業以上に、生徒が思考する機会、対話する機会を生み出すことができた。それによって、学んだことを転用し活用しようとする意欲も見られた。今後は「やりくり」をこれまでの定義に限定せず幅広くとらえることで、ラテラル思考が必要な活動や戦略的学習力を養う活動など多くの学習場面で使えるものとして活用できる可能性がある。

キーワード—授業づくり ラテラル思考 戦略的学習力

Abstract —Summarizing the research conducted at Tottori University Junior High School over the past four years. The classes using the concept of "YARIKURI" created more opportunities for students to think and interact with each other than conventional classes. This has allowed us to create more opportunities for students to think and interact with each other than in conventional classes. This has also given the students the motivation to apply what they have learned. In the future, by broadening the definition of "YARIKURI" to include a wide range of activities, there is a possibility that it can be used in many learning situations, such as activities that require lateral thinking and activities that foster strategic learning skills.

Key words — Classroom building , Lateral thinking, Strategic learning skills

1. 研究主題について

鳥取大学附属中学校(以下、本校)では、研究主題を「学ぶ力を育む「やりくり」授業の開発」と題して4年にわたって研究を続けてきた。

「やりくり」という言葉は本来「不十分な物事を種々に工夫して都合をつけること」という意味を持つ、日常的に使われる言葉である。

本校における「やりくり」授業とは、生徒に対して自立的、創造的、探求的な学びを促すことを目的とした活動であり、2019年度からは「既存の知識や技能、生活経験を駆使した、問題を解決するための思考を伴った行為」(中尾2020)と定義しながら研究を進めてきた。

それまでの研究でも「やりくり」という言葉を用いて授業づくりに取り組んでいた。しかし、その時は「やりくり」を「生徒が学習場面において身に着けた力を活かして、新たな問題を見抜く、または、新たな問題に対して工夫して対応すること」(中尾2018)と定義していた。これでは活用できる力が限定的になってしまうという課題が生まれたため再定義を行って研究を進めてきた。

2010年代頃から現代社会、はVUCA—Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)—の時代と表現されることが多くなった。VUCAとは本

来、冷戦終結後の1990年代からの不透明な軍事的戦略を意味していた。しかし、近年になり不安定で流動的で予測不能な社会情勢を示す言葉として用いられることが多くなった。ここ数年は新型コロナウイルスの影響もあり、学校現場でもこれまでの様式が通用しない状況が続いている。つまり、私たち教員も「やりくり」を迫られており、やりくりする力の重要性を再認識している。

そのような時代において「やりくり」授業は、生徒がこれからの未来を生き抜く力を身に着ける授業のスタイルとなりうると考え、「やりくり」授業の開発に取り組んできた。

2. 本校のめざす生徒像と「やりくり」授業

本校ではディプロマポリシー(学びの中で習得してほしい力や能力)として以下の項目を掲げている。

- 自己を認め、他者を認める態度
- 考えを深めていこうとする意欲
- さまざまな知識・情報・技能を相互作用的に駆使して考え、表現する力
- さまざまな体験を通じて感じ、創造する力
- 充実した日常生活を送るための基本的な生活習慣、知識と技能

「やりくり」授業を行うことによって、先に挙げたディプロマポリシーの中でも特に、「考えを深めていこうとする意欲」や「様々な知識・情報・技能を相互作用的に駆使して考え、表現する力」の育成がのぞめるのはなかと考え、実践を積んできた。

3. これまでの成果と今後の展望

2019年度以前の本校の研究では「やりくり」授業を副題として実践を行ってきた。その中で教師がとらえた生徒の変容は大きく3つに分類された。

1点目は「やりくり」は対話と親和性が高く、考えを伝えようとする意欲が高まったこと。2点目は、学びが深まり質的变化がみられたこと。3点目は、学習したことが他の場面へ応用されるようになったことである。

それを受けて、本研究主題「学ぶ力を育てる「やりくり」授業の開発」を設定して4年が経過した。

2020年度には、「やりくり」授業にはどのような効果があるのかを検討した。

学習評価の結果を分析したところ、2つの場面において顕著な変化が見られた。1つ目は知識を獲得する場面である。ここでは、活用する場面を想定する力や多面的に物事をとらえる力が向上したと考えられる。2つ目は問題解決の場面である。ここでは、パターンを組み替えて自分の考えを表現する力や問題を細分化して解決方法を探求する力が向上したと考えられる。

2021年には、授業者側の「やりくり」授業の開発に対する意識について検討した。授業設計を「楽しい」と感じる授業者は、生徒を統制する傾向が少なく自由な発想を促そうとする傾向が強いことがわかった。そのため、「やりくり」授業を行うには、授業における授業者の立ち位置の転換（「教える」立場から「支える」立場へ）が求められる。

授業者が「やりくり」授業を行う中で感じた生徒の変化を以下の表にまとめた。（下線は筆者による加筆）

多くの授業者が、思考を楽しもうとする生徒の姿をとらえていることがわかる。「よりよい解答」「よりよい解法」「よりよい表現」を求めて、教科書の枠を越えて思考し表現しようとする姿がみられる。

これは「やりくり」授業の大きな成果の1つだといえる。また、思考する過程において同じ課題を共有し合う他者（クラスの生徒）を意識した学習になっていることも、「やりくり」授業の特色の1つであるといえる。

自由に考えられる学習活動は、他者の自由な考えにふれることで、自分の思考をさらに深めたり表現の幅を広げたりできると考えられる。（表1）

表1 「やりくり」授業の実践によって感じる、生徒の変化

単元のまとめでの表現活動では、 <u>教科書にある表現だけでなく</u> 、「こんな表現はどうですか？」「これは使えますか？」という意見が増えてきた。
表現活動を重ねる度に、複雑な日本語訳を簡単な日本語に置き換えて、英訳することに慣れてきたように思う。
まずは素材をたくさん与えることから始めているので、時間がかかるが、たくさん与えることによって <u>その先の成長が著しい</u>
・講義形式よりも <u>意欲的に取り組む様子</u> が見られるようになったように感じる。
・ <u>思考の幅が広がってきた</u> ように感じる。
<u>粘り強く取り組むようになった</u> 。同じ内容でも他の表現を使ってみようとするようになった。
<u>多様な解を楽しむ</u> ようになり、自分や周りの <u>多様な思考を認める</u> ようになっている。
大人の意図をある程度理解し、意図に沿うように動いてくれる生徒が多い
<u>積極的な取り組み、仲間との関わり合い</u>
<u>自分で工夫しようとする</u>
<u>多様な解法を探求する姿勢</u> 。授業内容でとどまらず自分で問いを広げて <u>解き続ける姿勢</u> 。
図を変形したり、条件を変えたりして考える姿勢。
自分たちで考えて答えを出すことを <u>楽しんでいる</u> 。 <u>自由に考えようとする姿</u> があるような気がする。
自分とは違う意見の人がいたとき、 <u>その理由や視点を聞く</u> ようとする意欲が増えた。
問題に取り組む姿勢、 <u>試行錯誤しようとする姿勢</u> が増えたと感じる。
授業が楽しいという生徒が増えたと思います。
コミュニケーションがとれるようになった気がする。

また2022年度は、3年ぶりに研究発表大会を実施することができ、「やりくり」授業の設計について各教科の教員同士が改めて連携を強めることができた。研究大会後の授業者の振り返りでは、「授業の中で意識していること」として、やりくりできる課題の設定はもちろんのこと、生徒の自由な発想からどのように学びを深めるのか、または生徒同士の学び合いや表現させる方法など「やりくり」授業を通した生徒同士の関わり方（あるいは関わらせ方）などに関する記述が多くみられた。本校の教員が「やりくり」授業の設計を通して、生徒が有機的につながることによって深まる学びを意識していたことが伺える。

一方で、2022年度の研究大会を実施し多くの授業者の実践を通して、今後の課題も見えてきた。

一点目は、前述のとおり、多くの授業者は生徒同士の関わりの中で学びを深めさせていきたいと考えていることである。

我々授業者が生徒同士の関わりの中で「やりくり」場面を設定するとき、生徒によりラテラルな思考を要求していることが多い。ラテラルな思考とは日本語で水平思考と訳されるものである。これは、

イギリスのE=デノボが1967年ごろ唱えた思考法で、彼は「一つひとつ段階を踏まない思考プロセスを通して、あるいは異なる角度から状況を変えることによって、問題の答えを得たり、新しいアイデアを生みだしたりすることが可能になる」と述べている。(E=デノボ 2015)

この思考を使った「やりくり」授業としては、政策提案や商品開発などを課題とした授業があげられる。これらの授業では、提案するプランや商品のアイデアを固める前に生徒同士のだけに留まらず、時には授業者や第三者も交えたより多くの人との意見交流が必要であり、授業者にはこれまでの授業スタイルを転換することが求められる。昨年度の課題として挙げていた「ファシリテートする教員への転換」がこれにあたる。(中尾 2022)

二点目は、「既存の知識や技能、生活経験」の枠にとらわれない「やりくり」の可能性である。これまでの授業者が授業をつくる過程を見ていると、「まず知識を教え込まなくては」と考えてしまい、「やりくり」授業の行える場面や単元が限定されてしまっているように見られた。この原因として「やりくり」を「既存の知識や技能、生活経験を駆使する」と定義していることが考えられる。

「やりくり」という言葉を、本来的な意味に戻して考えれば、問題解決までの時間の使い方や情報の選び方も「やりくり」であるといえる。使える時間に制約がある中で、自分の考えを裏付けられる情報をいかに効率よく収集し、活用できるのかも「やりくり」ではないだろうか。このように解釈をすれば、また新しい「やりくり」授業を展開することができると考えられる。

このように「やりくり」を再定義しなおすと、学び方を学ぶことそのものが「やりくり」であり試行錯誤

をしながら自分の学びを調整していくことも「やりくり」ととらえることができる。これは「戦略的学習力」(マイケル・A・オズボーン 2017)にも通じる力であると言える。これはオクスフォード大学で行われた、2030年の雇用において必要とされる力を調査した研究で、最も重要なスキルとして取り上げられたもので、新しいことを学ぶ際に、状況に応じて最適な学習内容や学習方法を選択し、実践できる力・スキルと意味している。

以上のことから、授業づくりにおいて「やりくり」という考え方は、今後ますます我々授業者の可能性を広げることができるのではないだろうか。

参考文献

- 新村 出:広辞苑 第6版 岩波書店(2008)
- 中尾尊洋:学ぶ力を育む「やりくり」授業の提案ー鳥取大学附属中学校の研究主題についてー,鳥取大学附属中学校研究紀要 No.52, pp.1-11(2020)
- 中尾尊洋:自立し,つながり,探究し,創造する力を育成する学校教育の研究ー鳥取大学附属中学校における実践を通してー,鳥取大学附属中学校研究紀要, No. 49, pp.5-15 (2018)
- 中尾尊洋:教師の「やりくり」授業に対する意欲と「やりくり」授業を設計する意識との関連についての探索的検討,鳥取大学附属中学校研究紀要 No.53 pp.1-11(2022)
- E=デノボ, 藤島みさ子訳:「水平思考の世界」p.4 (2015)
- マイケル・A・オズボーン:The future of skills: Employment in 2030 (2017)